

いちゃればちよーでー

理事 山本 信也

「えっ、どじょうー？　なんで？」

地元の小学校の職員室での会話です。子どもたちが家庭で飼っているペットの調査結果が明らかになり、第一位イヌ、第二位ネコ、そして三番目にランクされたのが「どじょう」だったのです。イヌ、ネコは理解できますが、都会の真ん中の小学校で、付近には田んぼはおろか川もありません。この子どもたちの生活空間には土や水がないのです。アスファルトの道路とコンクリートの家、そしてわずかな緑です。

この話をPTAの広報の方から伝え聞いた我々おやじの会のメンバーは思わず笑みがこぼれました。その謎がすぐに解けたからです。おやじの会は毎年九月の中旬、地域のお祭りに参画

し、会場の一面に「どじょうつかみコーナー」を設けて子どもたちと遊んでいます。ただ捕まえるだけでは面白くないので、捕まえたどじょうをその子どもの目の前で素揚げにして食べてもらっています。そのまま持って帰ってもいいのですが、命をいただくということを理解してもらおう、との試みです。おそらくそれを見ていた子どもたちが、かわいそうに思っただけで帰る、ずっと家で飼っているに違いありません。聞いてみると、なんと名前まで付けて飼っている子どももいたのでした。

「うわー！ くさーい」

田んぼのあぜ道で、初めて田植えに参加した子どもが思わず発した言葉です。田んぼの中の泥を見て、ドロドロしたもの「汚いもの」「くさい」という回路が働いたのでしょう。「ちょっと待って。ほら、においをかいでごらん」と、田んぼの泥をすくって差し出すと、初めは後ずさりしていた子どもがそっと鼻を近づけてきて「ほんとだ。くさくさーい」。その一言で、子どもたちがはじけます。次々と田んぼに飛び込み、カエルやオタマジャクシにとっては受難の時間の始まりです。田植えどころではありません。

小さな小学校区に住むおやじたちが集まり、PTAとは関係なく、地域の社会教育関係団体として認められて二十五五年になります。この間、休むことなく続けてきたのがもち米作りで

す。厚木市の郊外に二〇〇坪ほどの田んぼを借り、農家の青年の協力を得て、田植えと稲刈りに取り組んでいます。そして収穫したもち米を小学校に運び込み、みんなで餅を搗いて収穫の喜びを分かち合うのです。毎回一五〇人ほどの子どもたちが参加。自分たちが育てたもち米だ、という想いがあるのでしょいか、見事な食べっぷりです。

ここでは、おやじたちにも出番が用意されています。リズム感あふれる杵きねの動きや腹に響く臼うすを搗く音に驚きと歓声が寄せられ、その日のヒーローになるのです。

「ばかやろう！」

猪苗代スキー場のロッジにおやじの会の阿部さんの声が響き渡り、ざわついていたその場は一瞬凍りついたようにシーンと静まり返りました。おやじの会のスノーキャンプで、オリエンテーションが始まった時のことです。降り積もった雪に興奮した子どもたちの騒ぎは、再三注意しても収まらず、思わず口をついて出た言葉でした。阿部さんは、このキャンプの責任者の一人で、二人の小学生の父親です。家庭の中でも外でもこのような言葉を使ったことのない方ですが、その強い責任感によるものだったのでしょうか。叱られた子どももさることながら、彼の二人の子どもたちも驚いたに違いありません。

しかし、阿部さんが素晴らしかったのは、場が落ち着くと、「ごめんなさい」とていねいに

頭を下げ、謝ったことでした。双方の信頼関係がまた新しい段階に入ったことを感じさせられる場面でした。

二人の息子たちはとうに三十歳をすぎているのに、相変わらずおやじの会の仲間と一緒にこのような活動を楽しくやっています。それは、「育てる会」の指導員の皆さんと子どもたちの間にあるような信頼関係を、この地域の中につくりたいと願っているからです。安心できる人間環境こそ、子どもたちにとって最高のゆりかごに違いありません。大好きな沖繩の言葉に「いちやりばちよーでー」というのがあります。「行き会えば兄弟」という意味です。この地域で生まれ育った子どもたちが、そんな「兄弟」になってほしいと願いながらこれからも活動を続けていきます。

やまと・しんや

一般財団法人日本青年館常務理事。公益財団法人育てる会理事。一般社団法人協力隊を育てる会副会長。大分県別府市の農家の長男として生まれ高校卒業後上京。大学卒業後に日本青年団協議会事務局に入り、青年団で「仲間づくり、地域づくり、自分づくり」を学ぶ。日本青年館では、青年教育や郷土芸能の保存振興、高校オーケストラ活動の振興等に取り組む。唯一の自慢は全国四十七都道府県のすべてを最低三回は訪れたことがあること。楽しみは、地域活動と山登りとそのあとの一杯。さらにその仲間を増やしていきます。